



1. 四条大橋高欄の設計公募
2. かんじんの所が抜けている
3. 「生と死の妙薬」から

1. 本誌9月号26ページに懸賞設計の募集広告が出た。一般に建築関係では懸賞設計が多く、多勢の建築家あるいはグループがそれに参加し、当選するとその設計によって現実の建築が生まれ得る。土木関係ではそのようなことがほとんどなく、そしてでき上がった構造物も、いろいろな立場の人が関与しているので個人の誰の設計といったことにはならない。公共的なものが多く、また強度、機能が設計を強く支配するので個性の発揮される余地が少ないから公募方式はとりこがったかも知れない。しかしそのことが、設計とか計画とか、頭脳をより多く使う部門に対する一般からの評価を甘くしてきたきらいがなくはない。コンサルタントの存在が次第に認められているし、どんなに示方書に忠実でもでき上りの図面にはある程度の個性が出るし、かつ広く周知を集められる、などなどで土木の分野でも懸賞設計がクローズアップされてきたのは当然といって良からう。建築と全く同じ方式が良いかどうか、土木設計のすべての分野が懸賞対象になるかどうか今後のあり方はまだ考える余地はあろう。しかしこのような機会を得て、特に新進気鋭の技術者諸氏は大いに腕を磨かれたらと思う。 (C)

2. 8月28日に科学技術庁から出された第3回科学技術白書は興味ある内容を含んでいる。世界各国とも繁栄の原動力である研究開発には巨額の資金を投入しており、研究投資の伸び率は国民所得の伸び率をはるかに上回っているが、特に目立つ特徴としては各国とも政府の研究費支出が民間のそれをずっと上回っていることである。わが国も戦後10年間の空白を埋めるべく昭和31年以降年率20%以上の増加率で研究投資を増加してきて、昭和37年には2812億円の巨額に達している。しかし諸外国とは逆に国全体の研究費の60%以上を民間企業が負担している不安定さは一考を要すると思われる。事実、景気調整の影響か37年度の民間企業の研究費増加率は数年来続けてきた20~30%台から9.5%に急減している。かつての帝国陸海軍は一部ではあるがわが国の技術水準を強引に引き上げる点で偉大な貢献をしていた。軍なきあと、このような長い眼で見た場合国家的にプラスとなる国内技術推進の役割をわれわれは一体どこに期待すればよいのであろうか。白書によって研究費の国民所得に対する割合を見ると西ドイツ1.98%、日本1.78%、フランス1.58%と独仏と肩を並べている。ところで技術輸出の技術輸入に対する割合を見ると5.2%であり西ドイツの27%、フランスの43%という昭和32年度の数字と比べてもけた違いの惨状にある。明らかにどこかかんじの所が抜けているのである。かつての軍にかわる強力な国家的推進力の欠除——このことにすべての責任を負わせるのが適当かどうかはわからない。しかし巨額の国家予算をつかって公共事業を行なう土木界こそ先進国化という国家的悲願にこたえる尖兵としての使命を負うべきなのではなからうか? 「抜けているかんじんのどこか」をわれわれはしつように追求しなければなるまい。 (J)

3. 「アメリカ公衆衛生局の調査団がレストランや会社、官庁などの食堂の食品検査をしたときに、どの食物からもDDTが検出された。」「ミルク、バターなどの乳製品に殺虫剤残留物が絶対に入らないようにせよといっても、検査のたびに残留物が見つかる。」「昆虫防除に化学薬品を使いだしてから、私たちは重大なことを見落していた。害虫防除に本当に効果があるのは、人間の力ではなく自然そのもののコントロールであるということだ。』

アメリカの生態学者カーソンは、戦後のアメリカにおける、多種大量の農薬はじめ化学薬品の使用が、自然の均衡を乱し、自然の逆襲が烈しい勢で始まっていると警告している。彼女はぼう大な資料を駆使して、その影響を説明し、耕地、森林、川がどのように恐ろしく変わりつつあるかを強く訴えている。これからも国土開発が力強く進められるわが国においても、開発の効果を生態学的に眺める視角が必要となってきたといえよう。(レーチェル・カーソン著、青樹築一訳、「生と死の妙薬」新潮社1964年6月発行) [S]